

## 【付録】モルディブ フィールド顛末記 —フィールドワークの教科書出版に向けての覚え書き—

2010年2月4日(木)～13日(土)於:モルディブ・マーレ

鴨川 明子(山梨大学)

### はじめに—フィールドワークのフィールドワーカー

モルディブに行くことになった。モルディブという響きだけでワクワクする上に、多くの先生方と一緒することができるなどとは、これで興奮せずにはられない。

私には、大学院生の頃から、先生や先輩に同行して「背中を見ながらフィールドワークする」という経験がない。聞けば、伝統ある国立大学の比較教育学ゼミナールの方々は、少なからずこうした経験を積んできていると言う。私立大学出身(早稲田大学)だからだろうか、そもそもそういうしきたりがあることすら私は知らなかった。

今回の私のミッションは一つ。これまで「似ている」という一言で片付けられてしまっていた教育開発研究者と(教育の)地域研究者。途上国の教育をめぐる異なった2つの立場の研究者を、少し引いた立場で見えてみるというミッションである。名づけて「フィールドワークのフィールドワーク」である。

そのミッションを遂行するために、覚え書き的メモを記すこととする。基本的に、このメモの存在は、少しの間、伏せておく(たぶん、私の性格だから、すぐに言ってしまうだろうが。事実、プライバシーへの配慮から、モルディブ調査わずか2日目にしてメンバーに伝えてしまう)。

### なぜ、モルディブか？

2009年7月—教育開発研究者代表の黒田先生から提起された(その後も問われることとなる)疑問は、「なぜ、モルディブか」という疑問である。

実に、もっともな疑問である。単に、「おもしろそう」「まだ研究されてない」という理由だけでモルディブ行きを楽しみにしていた地域研究者の森下さんと私。教育開発研究者から見ると、「『これまで研究されていない未知の国だから』と言う理由は、あまりに“地域研究者っぽすぎる”」のだろう。

改めて、もっともな疑問である。仮説を構築してから現地に赴くことの方が、教育開発研究者の間では(というよりは、多くの社会科学研究者にとっては)一般的である。そうであるとす

るならば、仮説を探しに行くための調査などは論外で、調査対象地そのものを検討すべきかもしれない。

一方、地域研究者代表の森下さんが当初から主張していた点は、「課題発見型の研究にしたい」ということ、そして、「焦って研究成果を出そうとしない」ということの2点である。そのため、初年度は、「マーレの街を歩く」ことに重きを置くことが主張された。後に参加を表明することとなる地域研究者の服部さんも、「マーレの街をふらふら歩くこと」に賛成した。

### **地域研究者のアイデンティティ・クライシス**

2009年11月—この企画は、当初から、円滑に進んだわけではない。企画が軌道に乗り始めた契機は、この名古屋会合にある。

この発端は、地域研究者が共通して、同時期に、それぞれの理由から、アイデンティティ・クライシスに陥ったことであった。多忙なメンバーであるが、何とかスケジュールをやりくりして急遽会合を開くこととなった。私は、早稲田大学での午後の授業を終えて、名古屋に駆けつけるのがせいっぱいであったため、打ち合わせにはほとんど参加できず、まるで名古屋まで夕飯(あんかけ焼きそば)を食べに行ったといってもよいような形になった。会合の詳細は私には定かではなかったが、森下さんと服部さんが楽しそうに話を進めていたことは、お二人の様子から容易に想像がついた。多くの言葉をかわさなくとも通じ合える、地域研究者の神髄を見た気がする。

その会合では、地域研究者として、「ぼやぼや」「ふらふら」しながら、「課題発見型で行こう」ということを確認しあう。地域研究者の中ではせっかちな性格の私は、正直に言うと、もう少し急ぎたいと思った(でも、その場では言わないことにする)。何よりも、今回の名古屋会合で服部さんが参加を表明したこともあり、森下さんは俄然元気になる。この企画が軌道にのる予感がして、私も嬉しい。

話を本筋に戻すと、東京から名古屋までの新幹線の中で、早稲田大学大学院の川口純さんが探してくれた、EFAのMid-decade Assessment2007とEFA Plan of Action Maldives 2001: Follow-up to Dakar Framework of Actionに目を通した。開発研究者が、ある国を調べる際に、最低限読むべき資料とお見受けした。私は、専門とするマレーシアに関してこの種のレポートをよく読んだことはなかった。なるほどリサーチクエスチョンを立てる上では役に立つことに気づく。たとえば、観光業と漁業という限られた産業の中で、子どもたちの将来設計や進路形成が気になる。モルディブの中等学校には、関連する科目もあるようだ。

### **十人十色のホテル選び**

その後、森下さんが中心になりフィールド調査の企画を進めることとなった。私は、ホテルかツアーを探すという役割を任された。早い段階で分かったことは、モルディブに行くためには、メンバー全員で旅程を合わせて、ツアーを組むべきということであった。様々な旅行代理店に連絡し、ビジネス出張に対応してもらおうように交渉してはみたものの、ビジネス出張には対応していない場合が多かった。おかげでハネムーン関連の資料が大量に集まった。いつか、何かの折に役立てたいと思う。

さて、ホテルやツアーへの好みも十人十色である。限られた予算の範囲内で、出張とは言え、できるだけ快適に過ごすことができるホテルに泊まることを希望する3名は、マーレに新しくオープンした外資系ホテルに宿泊することに決めた(当初、外資系ホテルに開発系が、ローカルホテルに地域系がという案もあったが、あまりにもわざとらしい案であるとして却下される)。森下さん、奥田さんは、諸般の事情と好みから、同じマーレの別のホテルに泊まることになった。ホテルに対する好みは、黒田先生と私、森下さんと奥田さんがそれぞれ似ていて、開発対地域という構図にはならない。服部さんはきっと何を提案しても笑顔で応じてくださるであろう。それにしても、マーレのホテルは、値段が高い割に評判がよいとは言えない。

### **日本におけるモルディブの情報収集**

2009年12月ー服部さんは、常滑鬼崎北小学校教頭の近藤ひろ子先生に事前にお話を伺う。また、森下さんはJICAを通じて、現地の協力隊員の方へ、私は、旅行会社の方を通じて元協力隊の方に連絡をとるも、それぞれ日程が合わず事前に情報を得ることを断念する。当然のことであるが、元協力隊員の方は、日本で働いていたり家族を持たれたりして、平日にお目にかかることは難しい。ただ、関係の方々には連絡をとる過程で、モルディブ人で東京近郊に住んでいる方がいること、モルディブ人と結婚した日本の女性が少なくないことも知る。

### **お寿司屋での会合ーよりよい研究をー**

2009年12月ー森下さん、黒田先生、私が、東京にて打ち合わせを行う。黒田先生から、今回の調査に参加するメンバーには地域研究者の数が多いため、地域研究者の調査に対して、開発研究者としてコメントする立場をとりたいという提案がある。森下先生からは、JICAを通じてのアポ取りへの懸念が示された。これは、地域研究者には共有される感覚であろう。

同時に挙げた2つの提案を議論する中で、次の点を確認した。それは、今回のフィールド調査の目的は、教育開発研究者と地域研究者との違いを浮き立たせることにある。しかしながら、ことさらにフィールド調査を「ゲーム化」して競い合うということは避けるべきであり、結果としてよりよい研究をすることこそ、一義的に考える必要があるという点である。それゆえ、

黒田先生からの提案も、JICA へのアポとりに関して示された森下さんの懸念も、よい研究をするためには必要なプロセスであるという結論に至った。

### **「完璧すぎるアポとり」に不安がよぎらないと言えは嘘になる**

2010年2月ーいよいよ出発間近となる。森下さんと奥田さんのご尽力のおかげで、年末から年始にかけて「JICA 在外事業訪問申込書」により依頼していた、JICA を通じての関係諸機関へのアポイントメントであるが、要望通りにとることができたという返事を2月2日にいただいた。

森下さん作成の「モルディブ依頼書 20100104」によると、希望する訪問先は以下の通りである。

#### ●希望する訪問先リスト

##### ①モルディブ教育省 Ministry of Education

(教育政策、カリキュラム開発、国際連携等の担当の方へのインタビューおよび資料収集を希望します。Planning and External Relations Division がもっとも合っているのではないかと考えます。)

##### ②JICA/JOCV モルディブ事務所

(JICA がこれまで取り組んでこられた教育セクターの開発援助についてインタビューおよび資料収集を希望します。)

##### ③モルディブ高等教育カレッジ Maldives College of Higher Education

(大学本部:大学の概要について、Faculty of Education:モルディブの教育についての専門家、Faculty of hospitality and tourism:モルディブの主要産業である観光業へのキャリアデザインについての専門家、それぞれへのインタビューおよび資料収集を希望します。)

##### ④マーレ島内の基礎教育学校

学校の種別等によって下記のカテゴリーごとに1校ずつ訪問し、見学および校長または教員へのインタビューを希望します。

(1) Government School (特に、Special Class を併設している Jamaaludheen School または Imaadhuddin School を希望します。調整が難しいようでしたら他の学校でも結構です。)

- (2) Community School (就学前教育と中等教育を併設している4校のうちいずれかを希望します。)
- (3) Private School (中等教育を開設している English Preparatory And Secondary School または Male' English School のいずれかを希望します。)
- (4) 男女別学校(女子校の Aminiya School、男子校の Majeedhiyya School, Dharumavantha School のうちいずれかを希望します。女子校に男性が訪問できない場合には、服部・鴨川の2名のみで訪問します。)

⑤モルディブ政府の教育省以外の省庁など

教育省以外で、総合的に援助の窓口となっている省庁でのインタビューおよび資料収集を希望します。また、ユニセフなど教育分野での他の援助機関(国際機関や二国間援助)でご推薦いただけたところがありましたら、お願いします。

驚くべきことに、JICA の担当者の方はすべてのアポイントを完璧にとってくくださった。この点には感謝しても感謝しすぎることはない。ただ、誤解を恐れずに言うと、地域研究者は生来ひねくれものなのか、完璧すぎると不安になるものである。たとえば、メールで以下のように綴っている。

鴨川:(完璧すぎるアポへの不安を綴った森下さんからのメールへの返事として)

森下さんが不安に思われるのも、(教育の)地域研究者としては当然かと思います。その点、現地で議論できれば嬉しく思います。

森下さん:スケジュールがこれだけ過密だと、確かに不安です。スケジュール消化が目的化して、大事なものを見落としそうです。効率的であることと、価値があることとは全く同一ではないので。ただ、長期間滞在できるのではないので、致し方ないですね。

服部さん:スケジュールの過密、難しいところですが、主要な情報を把握するという点でよいのではないかと思います。それとは別に、その他の時間帯でふらふらしたいです。

**JICA を通じてのアポとリへのアドバイス**

地域研究者の多くは、JICA を通じてのアポト리를あまり経験したことがないのではないだろうか。今回のメンバーには、協力隊員としてなど JICA との業務経験がある奥田さんがおり、奥田さんからのアドバイスは参考になる。アポトりの際の要点は、以下の 3 点である。

- ・極力迷惑をかけない。
- ・できるだけ真意を伝えて正直ベースでお願いすべき。
- ・十分なお土産を準備する。

また、おみやげについては、将来のフィールドワーク本の発行を見越して、それぞれのアイディアを駆使して持ち寄ることとなる。さて、明日からモルディブ、マレーである。

### **マレーに到着ー街をふらふら歩くー**

2010 年 2 月 4 日ーモルディブ到着。1 日目。10 時間 30 分のフライト。7 時間弱のフライト(マレーシア)に慣れている私にはいささか長く、疲れるフライトであった。

2010 年 2 月 5 日(金)ーモルディブ 2 日目。一日かけて、町の北側を歩く。マレーのイスラミック・センターや目抜き通りを歩きつつ、これから訪問する学校の場所が意外に近くにあることを知る。少しずつ、訪問先の場所を確認する。それにしても、金曜日は、町のあらゆるお店が徹底して閉まる。マレーシアでは、マレー人だけでなく、華人やインド人が経営する店が多いため、それほど困ることはない。だが、マレーの店は徹底して閉まっている。ようやく少し冷たいものを飲むことができたのは、森下さんが泊まっているホテルだった。

街を歩く歩幅はいろいろで、地域研究者だから遅くて、開発研究者だから駆け足ということはない。意外にも、服部さんと黒田先生との歩幅が同じようである。

服部さんは、イスラーム関係の建物、モスクや廟に興味を示した。黒田先生は、教育関係のセンターや機関に。森下さんほかすべてのメンバーが強い関心を表現したのは学校である。

かくいう私は、ガイドブックに載っていたレストランがある度に興味を示し、説明してみせたが、あまり重要なことではなかったらしい。その国でよりよいフィールドワークをするために、食べ物や人間を好きになることは重要だと、大学院の先輩から教わったことがある。私は食べ歩くことがもともと好きのため、そちらにばかり興味が向くのである。

## ふたたび、なぜ、モルディブか？

楽しかった。でも、疲れた。その理由は、今日のハイライトである、町歩きを終えてからのディスカッションにある。

黒田先生は、「なぜ、モルディブか？」という点に、こだわりをみせた。地域研究者からいろいろと意見が挙げられたが平行線、という表現がぴったりくるかもしれない。地域研究者の研究がファクトファインディングである点、どういう目的で研究しているか理解しづらい点に始まり、今回のアポイントの取り方にまで話がおよんだ。

ディスカッションの途中で、服部さんに「なぜ、今回の企画に参加したのか」と水を向けたところ、「インドネシアのアチェなどの災害復興とモルディブの津波からの災害復興が重なる、後づけだけ」と答えた。森下さんからは、「これまでタイでやってきたことを、“早回し”でやってみることができるかを知りたい」とも。

私は、後づけ的に理由を言うことはできるけれど、「せっかくこういうメンバーが集まることのできる機会を逃す手はない」と本音を言う。今日の朝、「私のミッションは、みなさんの背中を見て、教材や教科書を作成することにある」と宣言した。改めて、「これから長くつき合うマレーシアを思うにつけ、他の国を見ることで、マレーシアを相対化させてみたい」とし、「新たにマレーシアの研究を続けていくための糧にしたい」。

黒田先生から、「モルディブであること理由づけ」「それぞれテーマを設定すること」という提案が挙げられた。2日目に続く。

## フィールドワークのティップスー “おみやげ道” の比較ー

2010年2月5日、3日目。街歩きのフィールドワークも2日目に入る。首都マーレの南側で、住宅街があるあたりをまわりつつ、明日以降の訪問先を確認する。

このチームも少しずつリラックスした雰囲気になりつつある。雰囲気がよくなりつつあるからか、今日はくだけた話題が挙がった。おみやげ、朝の過ごし方、食事代について、である。

まず、おみやげを、今回は皆で持ち寄ることとなった。地域研究者である森下さんは、季節の節分豆とめんたいせんべい。季節の食べ物はよく持って行くという。服部さんは、とてもきれいなクッキーの詰め合わせ、私は早稲田大学作成のゴルフ。偶然にも、地域研究者は、すべて“消えもの”を持ってきた。それに対して、開発研究者の黒田先生は高価な置物(12000円が6000円で買えた)など、残るものを準備してきた。

次に、食事代について。森下さんはタイに調査に行き現地の方と食事に行く時、財布からお金を出したことがないという。私も記憶をたどると、私が出したことはほとんどない。黒田

先生は、自らパーティを開いて援助関係の方を招くこともあるなど、自ら支払うことも少なくないそうだ。

最後に、朝の過ごし方。朝食をとった後に、部屋に戻るかどうかもひとそれぞれのようである。出かける準備を万端整え、朝食を取ったらそのまま出かけた派と、一度部屋に戻って歯を磨くなど身支度を食事の後にしたい派。複数で調査するときには、朝食時間を自由にするのが円滑に進めるコツの一つなのかもしれない。

### **適切に情報を聞く、ゆっくり様子をうかがうインタビュー目的の違い**

2010年2月7日、4日目。モルディブは日曜日からは各機関の一週間が始まる。朝から教育省にて大臣ほかにインタビューする。担当は黒田先生。普段から要職に就いている方とのやりとり慣れていらいっしょる様子で、スムーズにヒアリングを進める。

午後に、伝統ある女子校アミニヤ学校を訪問する。地域研究者の出番。担当は服部さん。ゆっくりと様子うかがいしながらインタビューを進める。有名な女子校ということもあって、対応にも慣れている。

2010年2月8日、5日目。どうも、開発研究者と地域研究者のインタビューに向かう姿勢が違うことに気づく。開発研究者は、一度しか会えない、しかも短時間しか会えないインタビューから、できるだけ多くの専門的な情報を“とろう”とする。いわば一期一会の精神で、短時間に、非常に体系だった質問のもとに、専門的な議論を繰り広げる。

その一方、地域研究者は、初めて会う人たちに、「どこまで聞いていいのか(服部さん)」を探ろうとすることを一義的に考える。たとえば、今回の調査では、イスラーム・カレッジとモルディブ高等教育カレッジの間にある微妙な関係について聞こうとすると、どの人も一様に様子が変わることを知った。その上、イスラーム教育の話が好きで話そうとはしない。インドネシアやマレーシアで、イスラームの話日本人である私たちが尋ねると、喜ばれる場合が多い。モルディブはイスラームの国であるにもかかわらず、なぜ、異なった反応を示すかは、今後深める意味がある予感がする。

また、地域研究者は、「相手との関係をゆっくり築こうとする(森下さん)」ため、一度に、何か情報を得ることよりも、「相手を喜ばせること」に主眼を置く。相手が喜ぶと次回も来て良いということになる。そうした先の長い関係を築こうとしているようである。開発研究者の立場から見ると、あまり体系だてられていない「ローキイ(黒田先生)」のインタビューをしているように見えるかもしれないが、長い目で見てみると、ラポールを築く上では意味のあることのように私は思う。

それにしても、マーレの街は不思議な街である。タクシーはどこに行くにも 20 ルフィアと価格が決まっている。おおよそどこにいても、タクシーをつかまえることはできる。例外と言えば、学校の送り迎えの時間ぐらいだ。

### **ミッションとは何か？**

2010年2月9日、6日目—JICA・JOCV 事務所訪問。私にとっては、初めての JICA 関連事務所の訪問である。JOCV のボランティア調整員の方々から、若者の失業率の高さや学校の先生への人々のイメージなど中心に、現地の情報を教えていただく。特に、モルディブ政府から、体育や音楽の協力隊員への要請が高いことを聞く。

事前の奥田さんのご意見から、おみやげをたくさん持っていくことにする。黒田先生によると、必ずしも JICA 関連の方々が研究に対して協力してくれることはないとのこと。今回の場合は、モルディブ事務所の方々が、大変親切にすべてのアポをとってくださった。

調査も折り返し地点を過ぎたからか、少しだけ夜更かししながら議論する。やはり、「ミッションとは何か？」についての議論がもっとも白熱する。「“ミッション”などという考え方がそもそもない」という森下さん。「ミッションがないなら、何のために研究するか」と迫る黒田先生。「“ミッション”はなくて、タイやモルディブでの研究を通じて、『人間の本質とは何か』に迫ろうとすることそのものが重要」と森下さん。うなづく服部さん。「人間の本質に迫ること」、これは服部さんと森下さんには共有されている考えのようだ。

正直なところ、私には、森下さんの言っていることがあまり分からない。ただ、今日は少し議論が前に進んだような気がして、さわやかな気持ちでいることはたしかだ。

### **誰に、どのように還元するか？—開発研究者の実務的な目的—**

2010年2月10日、7日目—森下さんにとっては、モルディブでの調査の最終日である。夜中の便で、帰路に就くため、夕食をとりながら、限られた時間の中で議論する。現地の人にどのように還元するかについての議論が再燃する。森下さんは、モルディブでもタイでしてきたことと同じようにゆっくり時間をかけて、モルディブの教育を知りたいと考えている。ただ、少しだけ、タイでの経験を早回しにして、4年間モルディブを見ていったら、何か現地に還元できるのでは、と問題提起する。一方、黒田先生によると、開発研究では、4か月ぐらいの間に何らかの成果や結果を出さなければならないというミッションが多い。単に、ファクト・ファインディングの研究の先に何があるのか、と繰り返し問いかける。望むらくは、このモルディブ調査も、次はどこかにプロポーザルを持っていくことから始めるべきである、と。

## **イスラーム・カレッジへのアポなし訪問—相手の気持ちをとく—**

同じく7日目。今日のアポイントメントは4件。いや、実際は、アポなしのイスラーム・カレッジを入れると5件になった。このアポなしのイスラーム・カレッジこそが最もおもしろいフィールド調査だった。朝一番に、モルディブ高等教育カレッジのホスピタリティ・ツーリズム学部への訪問を済ませた後、すぐそばにあるイスラーム・カレッジに向かう。事前に、森下さんが場所を見つけてくれていたが、アポはとれていない。

イスラーム・カレッジの入り口では、アポなし独特の、歓迎せざる雰囲気はただよい、次々と人が出てきては首を振る。なぜだか、少々嬉しくなる。これまで私がマレーシアで経験してきた雰囲気に近い。あれこれと理由をつけてお願いした後に、学長は不在と言うことが分かり、教員室に通されることになる。男性教員数名と話す。まず、「何しに来たのか？」と問われる。後から、敬虔なムスリムに見える教員が合流する。流ちょうな英語と、硬い表情で迎えられる。彼とのやりとりを通じて、ここでは、「人の移動やネットワーク」、「イスラーム諸国との国際関係」という言葉が禁句になるようである。私たちが用意した文脈とは異なる文脈が想定される。私が、パンフレットに書かれた「パキスタン」という言葉を口走ると、すぐさま不穏な空気がよぎる。

次の学校へのアポイントの時間となり、男性3名は退室する。その後、服部さんは、男性数名の教員と、私は女性の英語教員と別々に話をする。少しすると、服部さんのグループが立ち上がった。聞けば、イスラーム・カレッジ内を案内してくださると言う。服部さんによると、「男性が去って女性だけになってから、気持ちがとけていった」とのこと。それだけではないだろう。“服部さんマジック”にかかって、男性教員たちが、安心(信頼?)したのではないだろうか。地域研究者の、というよりは、服部さんのフィールドに臨む姿勢を垣間見た気がする。

## **ファクトファインディング研究へのデ・ジャブ的体験**

2010年2月11日、8日目—ユニセフを訪問する。ユニセフの所長から、「ファクトファインディングな研究もいいが、その後にプロポーザルを出す気はあるのか」と紳士的にしかしやや強い口調で言われる。私と服部さんは、思わず目を合わせる。まさに、昨日の夜、黒田先生が言っていたことと同じで、デ・ジャブかと思った。黒田先生にとってみれば、極めて当たり前の発想とのこと、開発研究者なら当然持つ考え方のようである。森下さんにも、この場に立ち会ってもらいたかった。

## **実務的な目的と学術的な目的—誰に向かって研究するか？—**

2010年2月12日、9日目—今日は、モルディブを発つ日。黒田先生、服部さんと、長い、とても長い朝食をとった。こちよ時間だった。これまでは、実務的な目的、つまりミッションとは何かという議題が多かったものの、今日は、学術的な目的にまで話がおよぶ。平たく言え

ば、学術的な貢献を誰にするかという話である。黒田先生は、アフリカを対象としていることもあってか、英語で、国際的な援助機関も視野に入れながら、国際学会で報告することを当然と考えている。一方、服部さんは、現地(インドネシア)の人びとに対して、インドネシア語で研究を還元し、時に研究協力し合っていると言う。服部さんにとっては、インドネシアの方々との研究協力の先に(あるいは次に)、英語で、国際的な場に研究を還元していくという仕事があると言う。一方、黒田先生も、そして私も、日本の東南アジア教育研究のレベルは非常に高いので、国際的に知られていないことは「もったいない」と常々思っている。誰をオーディエンスにするか、何語で、誰に向かって発信するか、誰に認められたいか。私は、できれば、両方をつなぐ役割を果たすことができるようになりたいと思っている(話の途中で、私自身が、ブルネイやマレーシア、モルディブなどのイスラーム教育(価値)と留学生政策について調べるとおもしろいのでは、と黒田先生に提案していただいたことも印象に残った)。

さて、余談だが、ここちよい時間の中で、服部さんが、「ギルティ」と言っていたことが、印象的だった。日本語でも英語混じりに話す、黒田先生の話し方がうつつたみたいだ。地域研究と開発研究の融合か!?

### おわりにー今後の課題ー

以下に、全体のフィールド調査に関して、今後の課題を記すこととする。

1. テーマやトピック、イシューを絞るか。
2. 次は、モルディブのどこへ行くか? どのアトール(環礁)へ行くか? アトールも、首都マーレと同じなのではないか?
3. 5人いれば、かける(×)5人にならなければならない。今回はそうだったか? という反省もないわけではない。
4. 開発班、地域研究班と分かれてフィールドすべきか、それとも、ともに研究することによってこそ融合や再構築が可能となるか。
5. アウトプットをどうするか。地域研究者的スピードでアウトプットが可能か?
6. フィールドワークをどのように教材化するか。

個別のリサーチクエスションの構造化。

1. 主要産業が観光業と水産業に限られる中で、児童生徒のキャリア形成がどのようになっているかという点にユニークな観点が持てること(モルディブ企画書より)。
2. 予備調査で分かったこと

- ① 産業構造と社会通念、親の意識－観光業には、主に男子・男性が従事する。女性は、家族と離れて暮らさなければならぬため、観光業に向かないという社会通念があり、実際も女性は観光業に従事しない。女性は、教師や看護師になりたがる。親も勧める。
- ② 教育省とナショナルカリキュラム－教育省も、キャリア教育やキャリア・ガイダンスに具体的な施策を実施していない。
- ③ 中学校－中学校(Grade8-10)で、Travel&Tourism という科目が設けられている。必須科目ではない。近年、中学校で3つに分けられるストリームの内、文系や理系よりも、ビジネス系のストリームを選択する生徒が増加している。
- ④ 大学－Hospitality&Tourism 学部を選択する学生は、意識が高いというよりは、何か他の選択肢を探りながら、あるいは友人の影響を受けるなどして学部を選択する。

### 3. 今後の課題

- ① 先行研究を読んで、フレームワークを固める。新たなリサーチクエスションの構築。アウトプットを考える。
- ② マレーシアとの比較可能性を探る。
- ③ 実際にアトールで働いている人へのインタビューをする。